9　外国語（英語）

第二言語習得のための効果的な授業の構築

―学びに向かう力を育む指導と評価の在り方について―

牧野　尚史

本論の要旨

新学習指導要領（平成 29（2017）年告示）では，生きて働く知識・技能を身につけ，実際のコミュニケーションの場で思考・表現・判断できる英語力をつけることが必要であるとしている。その英語力をつけるべく，昨年度は第二言語習得の認知プロセスに着目し，研究を進めてきた。今年度も「第二言語を習得する認知プロセスの過程を授業の流れにも反映させ，タスクを組み合わせることで，生徒に英語を活用する力が身につくのではないか」という仮説のもと，効果的な授業の流れとタスクを考えた。

さらに，「生徒が自ら学びに向かう力をつけるにはどうしたらよいか。」という部分に着目したい。これは昨年度の研究で第二言語習得に必要な要素であると気づいた点である。英語初学者が持つ，学習に対するモチベーションをどう維持して，どのようにして効果的に学びに向かう意欲を出させるかを考えていきたい。

そこで，第二言語習得の認知プロセスを考えた効果的な授業の流れとタスクを引き続き考えながら，「学びに向かう力」を育むための効果的な方略を検証していきたい。効果的な方略を示すことで，生徒自らが課題を見つけ，解決する方法を模索していく姿が学びに向かう力につながるはずである。

また本校の研究主題は，「探究的学習を通した，グローバル社会に生きてはたらく力の育成」である。自ら課題を見つけ，解決していく学びに向かう力はグローバル社会に生きてはたらく力であり，グローバルな視点へのアプローチも検証していきたい。

■キーワード　第二言語習得，学びに向かう力，ルーブリック

1. はじめに

小学校の新学習指導要領が令和 2 年度(2020 年度)から全面実施になった。外国語活動が小学校 3 年生と 4 年生で取り入れられ，5 年生と 6 年生では教科として英語を学習するようになる。教科書も改訂され，今まで以上にさまざまな語彙や表現に触れるようになる。中学校では，令和 3 年度(2021 年度)から新学習指導要領が全面実施となる。外国語科の目標は，「簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る「知識及び技能」，「思考力，判断力，表現力等」，「学びに向かう力，人間性等」それぞれに関わる外国語特有の資質・能力を育成する必要があり，その際，外国語教育の特質に応じて，生徒が物事を捉え，思考する『外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方』を働かせることが重要である。」と新学習指導要領に書かれている。つまり，生きて働く知識・技能を身につけ，実際のコミュニケーションの場で思考・表現・判断し，活用できる英語力が必要とされている。また「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」とは，「外国語で表現し伝え合うため，外国語やその背景にある文化を，社会や世界，他者との関わりに着目して捉え，コミュニケーションを行う目的や場面，状況等に応じて，情報を整理しながら考えなどを形成し，再構築すること」とある。「外国語やその背景にある文化を，社会や世界，他者との関わりに着目して捉える」とは，外国語で他者とコミュニケーションを行うには，社会や世界との関わりの中で事象を捉えたり，外国語やその背景にある文化を理解するなどして相手に十分配慮したりすることが重要であることを示している。また，コミュニケーションを行う目的や場面，状況等に応じて，情報を整理しながら考えなどを形成し，再構築することとは，多様な人々との対話の中で，目的や場面，状況等に応じて，既習のものも含めて習得した概念（知識）を相互に関連づけてより深く理解したり，情報を精査して考えを形成したり，課題を見出して解決策を考えたり，身に付けた思考力を発揮させたりすることであり，「外国語で表現し伝え合う」ためには，適切な言語材料を活用し，思考・判断して情報を整理するとともに，自分の考えなどを形成，再構築することが重要であることを示している。要するに，コミュニケーションを行う目的や場面，状況を意識し，生徒同士または生徒と教師との言語活動をとおして，英語の技能である 4 技能 5 領域を統合的に身に付けてい

くことが望まれている。また「知識及び技能」，「思考力・判断力・表現力等」に加え，「学びに向かう力，人間性等」がある。「学びに向かう力、人間性等」とは，言い換えると「主体的に学習に向かう姿勢」である。EFL（English as a foreign language）環境にある日本において，英語を意欲的に学習していくためには，どのように動機づけをし，自己調整学習をしていくか。その中でどのように自己効力感を高めていくということが重要になると考える。そこで，第二言語習得をする上で効果的な授業モデルを考え，さらに，学びに向かう力を育む指導とその評価の方法に着目し，研究を進めることとした。

2. 今年度の授業研究の視点

今年度の授業研究の視点は3つである。1つ目は，第二言語習得のための効果的な授業の構築である。2つ目は，評価の在り方について，そして3つ目は，学びに向かう力を育む指導についてである。1 つ目の第二言語習得のための効果的な授業とは，第二言語習得の認知プロセスにそった授業の展開のことである。今年度は1時間の授業の中だけでなく，単元計画の中にもこのプロセスを展開することを試みた。2つ目の評価の在り方については，単元で設定されたパフォーマンス課題に対するルーブリックシートを活用した評価をするようにした。ルーブリックを示すことで，生徒がより明確な目標を意識して 1 時間の授業に取り組むと考えたからである。3 つ目の学びに向かう力を育む指導については，今年度から新たに取り入れた視点である。この部分に着目のした理由としては，昨年度の研究で第二言語を習得するには動機の部分が大きく関わってくることをあらためて認識したためである。動機についてはどの教科の学習に対しても必要なことではあるが，特に第二言語を習得においては EFL 環境である日本ではこの習得に対する動機の部分が多く影響すると考え，生徒の学びに向かう力の育成に焦点をあてることにした。次に，それぞれの視点について詳細に述べていく。

3. 今年度の研究について

①第二言語習得のための効果的な授業の構築

昨年度の研究から引き続き，第二言語習得の流れを考慮した授業づくりをするようにした。ここで言う第二言語習得の流れとは，気づき，理解，内在化，統合という第二言語習得の認知プロセスのことを言う。昨年度は，この第二言語習得の認知プロセスを意識した1時間の授業展開を考え，実践した。今年度は1時間の授業の中でこの流れを展開することはもちろん，それに加えて単元をとおした第二言語習得の認知プロセスを考えるようにした。単元毎にパフォーマンス課題を設定し，バックワードデザインで単元の計画を立てる。ゴールであるパフォーマンス課題を成功させるために，単元をとおして気づき，理解，内在化，統合の認知プロセスのステップを取り入れるようにした。単元のゴール（パフォーマンス課題），単元の流れ，活動の目的などを書いた単元計画プリント（**図1**）を単元のはじめに生徒に配付をし，共有するようにした。各単元のはじめにガイダンスの時間を作り，単元計画プリントを配付し，内容を説明し，取り組んでいく活動や目標について共有するようにした。プリントには気づき，理解，内在化，統合といった専門的な用語をあえて使っている。年度初めの授業開きのときに第二言語習得の認知プロセスについて生徒には説明しているため，これらの専門用語の意味については理解しているものと考えているためである。また計画表だけでなく，単元のゴールなるパフォーマンス課題，そして単元をとおして身に付ける力についても記載している。さて，**図1**の単元は全8時間で構成している。先述したように1時間の授業の中だけでなく，単元をとおして「気づき」，「理解」，「内在化」，「統合」の流れを作るようにしている。

Lesson 6　Schedule and Feedback Sheet

Class:_____ ID:_____ Name:_____

Goal of this lesson : Let' s make a declaration！～宣言文を作ろう！～

□ 英語で人権に関する宣言文を作ろう

□ 「やさしい言葉で書かれた世界人権宣言」の条文を引用しよう

Final task

Lesson Plan

Period	Activity		Point	task・評価
1st	Listening Dictation	気づき	曲を聞いて、歌詞の一部を理解する 曲のテーマについて気づく	
2nd	Listening 音読 Thinking	気づき 理解	音声を聞いて、内容を理解する 表現や単語に注目して、音読をする 知っていることを書きあげてみる	
3rd	Listening 音読 Writing	気づき 理解 内在化	音声を聞いて、内容を理解する 表現や単語に注目して、音読をする 人物紹介をする	紹介文を作る
4th	Drill Grammar	理解 内在化	学習した表現の練習をする 学習した表現を活用する	
5th	Reading	理解	速読～精読へのステップアップ Reading	
6th	Interaction Thinking	気づき 理解	キング牧師のように差別に立ち向かった人たちのことについて知る	
7th	Reading Writing	統合	「やさしい言葉で書かれた世界人権宣言」の条文を読み、自分の宣言文を作る	宣言文作成 ※ルーブリックによる評価
8th	Sharing	統合	グループで自分の宣言文を紹介する	

In this Lesson,

□ 後置修飾の形を理解し、人物や物を紹介するときに使うことができる。

□ 人物について 10 文程度の紹介文を書くことができる。

□ 英語の長文の読み方（速読・精読）について使い分けができる。

□ 人権の大切さについて学び、考えることができる。

図1　単元計画プリント

図１の「Lesson Plan」の１時間目を見ると「気づき」とある。単元をとおしたテーマについて気づいてもらう時間である。「気づき」については直接，言語習得には関係のないものと思われるかもしれないが，この単元をとおした気づきの部分が言語習得に必要な動機づけを促す部分と捉えると，認知プロセスの過程の１つととらえることができると考た。その他にも理解や内在化の時間を作り，単元計画の中の１時間がどのような認知プロセスの時間となっているのかを可視化し，意識して授業をうけることで，統合的であるパフォーマンス課題に向けたレディネスが養われると思われる。

以上のような理由ら，第二言語習得のための効果的な授業の構築として，「1時間の授業展開」，「単元の流れ」の両方に第二言語習得の認知プロセスの流れを考えるようにした。

②評価の在り方について

学びに向かう力を育むためには，授業で指導したことが，適切に評価される必要がある。生徒が学んだことが成果として現れ，それが適正に評価されるからこそ，生徒も学ぶ意欲が出てくるというものである。評価の材料は何もペーパーテストの結果だけではない。特に英語のような言語を学ぶ場合は，発信する力がどれだけ身に付いているかが問われる。発信する力がどれぐらい身に付いているかを知るための方法としては，会話形式のスピーキングテストや発表形式のプレゼンテーション，他にも自分だけが知っている内容を伝えるような活動などがある。またスピーキングだけにかぎらず，手紙や日記，感想文など書くことも発信する活動である。そういった発信する活動（第二言語習得の認知プロセスでいう統合）の評価の在り方を見直した。また何を目指して学習すればよいのかが可視化されると生徒の学ぶ意欲や姿勢に変化があるのではないかと考えた。そこで，今年度は単元計画プリントと合わせて，パフォーマンス課題に対する評価を表したルーブリック評価シート（**図２**）を作成し，評価の内容を生徒と共有するようにした。ルーブリック評価シートの内容は単元の最後に実施するパフォーマンス課題のテーマによって変わってくる。**図２**は「Let’s make your own declaration!～宣言文を作ろう～」というライティングのパフォーマンス課題のために作成したルーブリック評価シートである。評価規準としては，正確さ（accuracy）と流暢さ（fluency），そして内容（content）の３つにし，評価基準はA^+（十分満足できる）～C（努力を要する）の４段階とした。単元のはじめにこのルーブリック評価シートを配付し，評価の方法について説明し，身に付けるべき力を明確に示すようにした。ルーブリック評価シートがあることで，生徒は「どのような学習をしておかないといけないか」や「自分のパフォーマンスがどのように評価されるのか」を意識するようになり，「このレベルを達成したい」と目標を持ったりする生徒も出てくると思われる。以上のことから，今年度は単元毎にルーブリック評

Lesson 6 ルーブリック評価シート

Class:_____ID:_____Name:_____

Goal of this lesson : Let’s make your own declaration! ～宣言文を作ろう～

評価規準 ＼ 評価基準	Writing (Let's make your own declaration!)		
	Accuracy(正確さ)	Fluency(流暢さ)	内　容
A^+　十分満足できる	スペルミスや文法（冠詞、単数複数、時制、語順、三単現のＳなど）のミスがほぼない。（０～2 個）	今まで学習した言語材料や語彙を使い、90 語以上で書けている。	まとまりのある構成で①理由や根拠、そして②自分の考えや意見が述べられており、③今ある差別の現状についても触れられている。
A　満足できる	スペルミスや文法（冠詞、単数複数、時制、語順、三単現のＳなど）のミスがあまりない。(3～4 個)	今まで学習した言語材料や語彙を使い、80 語以上で書けている。	まとまりのある構成で①理由や根拠、そして②自分の考えや意見が述べられている。
B　おおむね満足できる	スペルミスや文法（冠詞、単数複数、時制、語順、三単現のＳなど）のミスが見られる。(5～6 個)	今まで学習した言語材料や語彙を使い、50 語以上で書けている。	上記Ａの①～②のいずれか１つが書けていない。
C　努力を要する	スペルミスや文法（冠詞、単数複数、時制、語順、三単現のＳなど）のミスが多い。(7 個以上)	今まで学習した言語材料や語彙を使おうとしているが、50 語を満たしていない。	上記Ａの①～②のいずれも満たしていない。

図２ ルーブリック評価シート

価シートを作成するようにし，生徒のパフォーマンスへどのような影響を及ぼすのかを検証してみることにした。またルーブリック評価シートの内容の示し方についても検討する必要があり，わかりやすい，明確な内容についても検証することにした。

③学びに向かう力を育む指導について

P2 にすでに述べているように，英語学習においては，「動機」の部分が大きく影響しており，日本のような EFL(English as a foreign language)の環境であると，日常生活で英語を必要としないため，英語を学習する必然性がなく，学習の動機づけとしても弱いように感じる。

そこで生徒が学習意欲を維持しつつ，英語を活用する力をつけていくために必要なことは何かということを考え，実践するようにした。実践の方法として，単元の終わりに実施するパフォーマンス課題の後にフィードバックシート（**図 3**）を配付し，単元のフィードバックをさせるようにした。フィードバックの方法としては記述式で，振り返るポイントは，できたこと（成果），できなかったこと（課題），今後の学習をどのようにしていくか（課題・展望）の 3 つの視点で振り返るようにした。記述した内容も評価することとし，その評価のポイントをルーブリックで示した。評価の観点としては，

Feedback

Reading 内容理解	
[Writing] 人物紹介 宣言文	
Sharing	

Feedback の視点について

Reading	・長文を読むときに工夫したことについて。 ・速読のときに意識したこと、精読のときに意識したことについて。 ・理解しにくい表現があったかどうか。 など
[Writing] 人物紹介 宣言文	・人物紹介、決意表明のときに工夫したことについて。 ・英語で書きにくかった表現について。 ・内容の構成について。 など
Sharing	・自分の Writing を相手に口頭で伝えるときに工夫したことや意識したことについて。 ・発音やイントネーションについて。 ・やり取りができたかどうかについて。 など

Feedback 評価のポイント

	A	B	C
関心・意欲・態度（主体的に学習に取り組む姿勢）	単元でした活動を振り返り、反省点とそれに対する改善点がくわしく書けており、自身の英語力を向上しようという意欲がうかがえる。	単元でした活動を振り返り、反省点やできたことについては書けているが、改善に向けての具体案があまりない。	単元でした活動を振り返るにとどまり、反省点や改善点があまり書かれていない。

図 3　Feedback シート

現行の学習指導要領では，「関心・意欲・態度」の部分になる。来年度から全面実施となる新学習指導要領においては，「主体的に学習に取り組む態度」の部分にあたる。毎時間の振り返りではなく，単元をとおした振り返りにした。その理由は，パフォーマンス課題が単元末に設定されてあり，単元をとおして，第二言語習得の各プロセスでどのような学びをしたのかについて振り返ることが，次への学びにつながると考えるからである。パフォーマンス課題を終えていなければ，学びの成果がどのように出て，課題となることは何かがわからないからである。学びの成果や課題がわかるからこそ，次の学習への展改善点や望が見えてくるのである。この 3 つの視点，「成果」，「課題」，「改善・展望」を意識した振り返りをさせ，生徒の学びに向かう力にどのような影響を与えるのかを見ることにした。また，単元計画プリントを配付することも，この「学びに向かう力」を育む指導の 1 つである。単元計画シートで単元の学習の流れが示されているので，学習の先取りができる。よいパフォーマンスをしたい，よい評価を得たいと思う生徒は授業計画を見て，学習を進めることができると考え，実践した。

3. 考察

①第二言語習得のための効果的な授業の構築

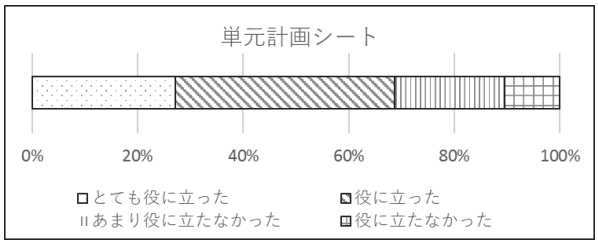

図 4　生徒アンケート結果（単元計画シート）

昨年度から「気づき」，「理解」，「内在化」，「統合」の流れを展開する授業をするようにしている。また単元計画シートでもこの認知プロセスを意識した授業計画をしている。単元計画シートについてアンケート調査を行った。結果は，**図 4** にあるように約 7 割の生徒にとって役に立ったというものであった。役に立った理由としては，以下のようなものであった。

- ●ゴールがわかることで授業ごとで学習していることがゴールの達成に役立つ気がして，勉強するモチベーションが上がったから。
- ●大体どんなことをするのか，どんな目標・目的があるのか知っていると，それまでの授業でも意識して力を入れられるから。
- ●プレゼンテーションなど準備が必要な時はあった

方が見通しを立てて計画的に準備できるから。

●次の授業内容がわかり，計画的に学習を進められるから。

●だいたいの授業の時間の流れがわかるから，自分が次何をしないといけないのか把握できるので便利だったから

●英語に苦手意識がある人は文法などを予習しておきやすいので，今後もあった方がいいと思う。

反対に約 3 割の生徒にとっては役に立たなかったという結果であった。役に立たなかった理由としては，

- この紙をフィードバックのとき以外見ないから。
- ファイルにはさんでしまって，わざわざ見ることがなく単元が終わってしまっていたから。

というものであった。

成果としては，単元計画シートがあることで学習の見通しが立てられるようになり，予習をして授業に臨むことができるようになるということである。他にも苦手な生徒が安心して授業を受けるきっかけとなることも成果の一つである。

課題としては，単元初めのガイダンスでは見るものの，その後ファイルに挟んだままで見ることがないというものである。今後は単元の途中に単元計画シートを見る時間を作るなどして，見通しを再認識させる時間を作り出していきたい。

②評価の在り方について

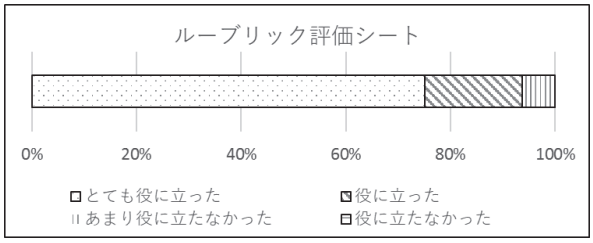

図 5　生徒アンケート結果
（ルーブリック評価シート）

アンケート結果（**図 5**）は，約 9 割の生徒が役に立ったと回答した。役に立った理由としては，

- 何を意識するべきかがわかることがよかった。成績や評価という意味だけでなく，学習の参考になったから。
- 何を意識して，身に付けていかなくてはいけないのかがわかって学習がすすめやすかったから。
- レベル別に英語力をつけることができるし，目標が立てられる。
- 何をすれば良いのか，どうすれば評価が上がるのかがわかり，やることが明確になったから。
- 何を意識して取り組むべきかが明確にわかったから。

というものであった。ここから見える成果としては，ルーブリック評価シートを活用することで，どのように評価がされるのかがより鮮明になり，生徒もある意味安心して課題に挑むことができた。単元のはじめからゴールの課題を意識する生徒も見られ，目標達成のために，授業以外で自主的に学習する生徒がいた。またスピーキングの課題であれば，事前に話す内容を考え，練習したり，ライティングであれば事前にわからない単語を調べたりする生徒が見られた。またルーブリック評価シートがあることで，生徒の学習に対する意識だけでなく，指導する側の意識にも変化があるように思う。あらかじめ評価の方法があるので，生徒にどのような力をつけるべきなのかが明確になり，授業の内容もそれにあわわせた活動であったり，指導の方法であったりを考えるようになった。つまり，ルーブリック評価シートを作成し，はじめに生徒と共有することは，まさしく指導と評価の一体化に繋がっていくものである。

課題としては，各観点の中身である。文章表記によるものなので，わかりやすい内容になっているかどうかや各基準の内容に齟齬がないかなどを判断することが難しい時がある。生徒も教師も評価について同じ理解をしておく必要がある。そのため，配付する際に内容を一緒に確認するようにはしていが，単元の学習を進める中，生徒自身が見返したときにも同じ理解でいるかどうかが問題である。評価は生徒の動機づけや学習意欲だけでなく，自己調整学習にも大きく関わってくるものである。「やってみよう」，「これならがんばればできる」という自己効力感が持てるような内容を今後も検討していきたい。ルーブリック評価シートを作成する際，生徒が評価の内容を決めるという方法もある。まだ実践したことはないが，生徒自身が評価内容を考えるということは，課題を考え，それを克服するための視点を身に付けるよい機会になると考える。ルーブリック評価シートは今後も活用していき，生徒自身が評価の規準を作成する力を養い，最終的には生徒自らが作成する評価シートを活用するような取り組みもしていきたいと思う。

③学びに向かう力を育む指導について

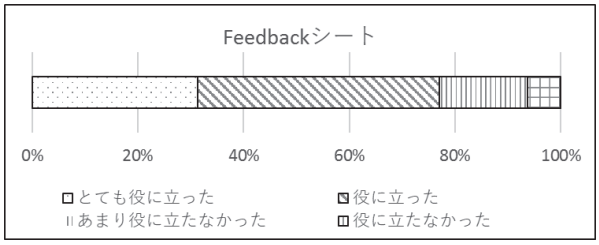

図 6　生徒アンケート結果（Feedback シート）

今年度，学びに向かう力を育てる指導の手立てとして，フィードバックシートを活用した。Feedback シートの活用にあたって生徒のアンケート結果（図6），約8割の生徒が振り返りをすることが役に立ったと回答した。理由としては以下のようなものであった。

- 自分の改善点について考え，どうすれば英語力がつくかいろいろな方法を試して，自分に合ったものを見つけられたから。
- 自分が今までやってきたことを振り返る時間を作ることで，次の単元につなげることができたから。
- 自分の学習をしっかり振り返り，次どのように学習を効果的に進めるかに役立った。
- 自分の何が良くて，何が良くなかったか考えて，改善に役立てられたから。
- 自分の反省点がわかり，次に何をすればいいかにつながる。

アンケート結果から見える成果としては，単元ごとに学習した内容を振り返ることによって，生徒自身の学びを再度，確認するためのよい場となったことである。振り返りシートとしてよく見るのは，質問に対して与えられた選択肢を選んで，答えるというものである。例えば，「活動は楽しかったかどうか」や「どれくらい理解できたかどうか」などといった質問に対して，自分に当てはまるものを選んで丸をして答えるといったものである。この方法は時間短縮となり，手軽にできるという利点はあるが，振り返る視点としは次の学びにつながらないように思う。そこで，次の学びにつながるように選択形式の内容ではなく，記述形式の内容にした。学習したこと内容を自分の言葉で書き出すことで，より具体的に振り返ることができるからである。生徒自身，振り返ることで学びを確認し，次の学習に向けた方略を立てることができた生徒もいた。

課題としては，課題に対して工夫したことやできたことはよく書けているが，振り返るだけに留まり，次の学びへのつながりがない内容が多く見られることである。他にも課題を書き，それに対して次はどうするということまでは書けているが，具体的な方略がないものもあった。また**図6**のアンケートで「役に立たなかった」と答えた生徒の理由として，「フィードバックしても勉強方法が改善できなかったから」という意見があった。反省点がわかり，改善しようという意欲はあるが，具体的な方法がわからないため，改善ができず，結果として振り返りが役に立たないケースもあるということである。具体的な方略を立てることができる生徒にとっては役に立つが，そうでない生徒に対しての対策が今後は必要になることがわかった。

4. 今後の研究について

今年度は，①第二言語習得のための効果的な授業の構築，②評価の在り方，そして③学びに向かう力を育む指導の3つの視点を取り入れ，研究を進めてきた。検証する中で，生徒の学習に対する姿勢に変化が見られたことは成果である。今後はこれらの内容にさらなる改善を加え，生徒の学びに向かう力に磨きをかけていきたい。また新しい視点として，生徒の自己調整学習能力を向上させ，自己効力感を高めるための手立てを研究していきたい。理由としては，EFL 環境にある日本において，英語を学ぶための動機づけと，英語を使って伝えたいと思えるような取り組みが必要だからである。年度の途中で3年生に実施した生徒の英語に関するアンケート結果からは，英語4技能の中で一番苦手な技能はライティング，続いてスピーキングという結果になった。これらはどちらも第二言語習得の認知プロセスでいうところの統合（アウトプット）の部分である。逆に，インプットの部分であるリスニングやリーディングは得意と回答する生徒は7割程度であった。やはり，英語を使う場面では，間違いが目立ってしまう。言語習得に間違いはつきものであるが，学級の環境や自己効力感の程度によって，「間違ってはいけない。」という意識が英語活用にブレーキをかけてしまうことがあるのかもしれない。間違いを恐れずに，英語を使う姿勢（動機や意欲，学びに向かう力など），は自然と身に付くものではなく，指導することで身に付いていくものではないかと考える。今年度の実践を継続しつつ，自己調整学習の方略についても合わせて研究を進め，実践していきたい。

参考文献

文部科学省「中学校学習指導要領（平成29年告示）解説外国語編」
ディル・H・シャンク，バリー・J・ジマーマン　編著　塚野州一　編訳「自己調整学習と動機づけ」（2009）